党の再組織について（秘密活動から公然・半公然……）

党の再組織について

Ⅰ

わが党の活動条件は根本的にかわりつつある。われわれは集会、結社、出版の自由を奪取した。もちろん、これらの権利は極度に不安定で、現在の自由を頼りにすることは、犯罪ではないとしても、分別のないことであろう。決定的な闘争はまだこれからであるから、この闘争の準備をすることを第一位におかなければならない。党の秘密機構は存続させねばならない。しかし、それと同時に、現在のやや拡がった活動の自由をもっとも広範に利用することが絶対に必要である。秘密機構とならんで、つぎつぎに新しい、公然・半公然の党組織（と党に同調する組織）をつくることが絶対に必要である。この最後の活動なしには、われわれの活動を新たな条件に適応させることも、新しい任務を解決することも、不可能である……

組織を新しい基礎のうえにおくためには新しい党大会が必要である。規約によれば党大会は年一回ときめられ、一九〇六年五月にひらかれることになっているが、大会を早目にひらくことがいまや必要である。われわれがこの機会をとらえなければ、機を失するであろう――労働者が極度に痛感している、組織にたいする要求が、よくない、危険な形をとって、「独立派」といったものを強化するであろう、等々という意味で、機を失するであろう。大いそぎで新たな組織をつくらなければならない。新しいやり方を全党の討議にかける必要がある。「新しいコース」を大胆に、断固たる態度できめる必要がある。

……革命的社会民主主義の代表者であり、かつ「多数派」の味方であるわれわれは、党の民主化を徹底的に実行することは秘密活動の条件のもとでは不可能であったということと、こうした条件のもとでは「選挙原則」は空文句であるということとを一度ならず述べてきた。そして生活はわれわれの言葉な確認した。……しかし、条件がかわれば、すなわち政治的自由へうつったばあいには選挙原則にうつることが必要であることをわれわれボリシェヴィキはつねにみとめてきた。……

そこで、任務は明らかである、すなわち、さしあたり秘密機構を存続させるとともに、新しい、公然たる機構を発展させることである。大会に適用してみると、この任務（その具体的な遂行は、もちろん、実践的な手腕と場所と時のいっさいの条件の知識とを必要とするが）は、規約にもとづいて第四回大会を召集すると同時に、ただちにいますぐ選挙原則の適用をはじめるということになる。中央委員会はこの任務を解決した。すなわち、〔地方の〕委員は、形式的には有資格組織の代表者として、また実質的には党の継承性の代表者として、議決権をもって大会に参加する権利をもつ。中央委員会は、全党員からえらばれた、したがってまた、党に所属する労働者大衆からえらばれた代議員を自分の権限にもとづいて評議権をあたえて〔大会に〕招待した。中央委員会はさらに、中央委員会はただちにこの評議権を議決権に変えるよう大会に提案するであろうと声明した。諸委員会の有資格の代議員はこのことに同意するであろうか。

中央委員会は、中央委員会の意見では彼らは無条件に賛成するであろうと声明する。私個人としては、このことを深く信じている。こうした事に同意しないわけにはいかない。

社会民主主義的プロレタリアートの指導者の大多数がこれに同意しないとは、考えられない。われわれの確信するところでは、新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』が非常に綿密に記録している党活動家の声は、われわれの見解の正しさをまもなく証明するであろう。このような措置をめざす（評議権を議決権に変えることのために）闘争の生じることが予期されるとしても、その結末は疑う余地がない。

この問題を別の面から、すなわち形式的な観点からではなく、本質的な観点から一瞥してみたまえ。われわれが提案した計画の実現は、社会民主党に危険なことをひきおこす恐れがあるだろうか。

社会民主主義者でないものが、大量に一挙に党にはいってくる点に、危険な点があると考えることもできよう。そうなれば、党は大衆に解消してしまうであろう。党は階級の自覚した前進部隊ではなくなるであろうし､党は後尾の役割になりさがってしまうであろう。それは無条件に悲しむべき時期となろう。そしてこの危険は、**もし**われわれのあいだにデマゴギー癖がある**ならば**、またもし党の諸原則（綱領、戦術上の原則、組織上の原則）がまったく欠けているか、それともそれが薄弱で動揺しているならば、たしかに、**きわめて重要な**意義をもつようになる**かもしれない**。しかし、まさにこの「もし……ならば」などなにもないというのが真実である。われわれボリシェヴィキのあいだには、デマゴギー癖がなかっただけではない、それどころか、われわれはつねに、きっぱりと、公然と、まっこうから、どんなに小さなデマゴギーの試みともたたかってきたし、党に所属するものに階級意識を要求し、党の発展における継承性の巨大な意義を強調し、規律をおしえ、全党員か党の一組織内で教育されるようにおしえてきた。われわれのあいだには、確定した綱領かある。この綱領は、すべての社会民主主義者によって正式にみとめられたもので、その根本的命題ではどんな核心にふれた批判もくわえられなかったものである（個々の条項と定式の批判は、あらゆる潑剌たる党ではまったく正当で必要な事がらである)。われわれは、第二回大会でも、第三回大会でも、また社会民主主義的出版物の多年の活動によっても首尾一貫して、系統的に仕上げられてきた戦術的決議をもっている。われわれは、いくらかの組織上の経験も実際の組織ももっている。そして、この組織は教育的な役割をはたして、疑いもなく成果をあげているのであって、この成果はすぐにはわからないが、それを否定できるのは盲目か盲目にされた人だけであろう。

そうだ、同志諸君、われわれはこの危険を誇張すまい。社会民主党は名をなし、一傾向を創出し、社会民主主義的労働者のカードルをつくりだした。そして、英雄的なプロレタリアートが闘争の用意と、はっきり自覚した目的をめざして一致団結して、根気づよくたたかう能力、純社会民主主義的な精神でたたかう能力とを、実際にしめしている現在、わが党に所属している労働者や、中央委員会の招きに応じて明白にもわが党にはいってくる労働者が、九分九厘まで、社会民主主義者であろうということを疑うのは、まったくおかしなことであろう。労働者階級は本能的・自然発生的に社会民主主義的であるが、社会民主党の一〇年以上にわたる活動はこの自然発生性を意識性に転化するために、すでに実にすくなからぬことをしとげている。同志諸君！　ぞっとするようなことを自分の空想ででっちあげてはならない。あらゆる潑剌とした、発展しつつある党には、つねに不安定と、動揺と、逡巡の要素があるものだということをわすれてはならない。しかし、これらの要素は、社会民主主義者の堅忍不抜な、結束した中核の働きかけに服しているし、将来も服

するであろう。

わが党はながいあいだ地下にあった。第三回大会の一代議員が正しく述べたように、わが党は、過去数年のあいだ、そこで窒息していた。地下運動はなくなりかけている。大胆に前進せよ。新しい武器をとれ。それを新しい人人にわけあたえよ。自分の拠点を拡大せよ。すべての社会民主主義的労働者を呼びよせよ。彼らを、何百人、何千人と、党組織の隊列に加入させよ。党組織の代議員は多くのわが中央機関を活発にするがよい。彼らを通じて若々しい革命ロシアの生新の気が流入するがよい。こんにちまで革命はマルクス主義の基本的な理論的命題を、社会民主党の本質的なスローガンがすべて正しいことをくりかえし立証してきたしまた立証した。革命はまた、**われわれの**社会民主主義的な活動の正しさを立証し、プロレタリアートの真の革命性にたいするわれわれの期待と信頼の正しさをも立証した。党の必要不可欠な改革におけるくだらないことを全部投げすてよう。ただちに、新しい道に立とう。それは、われわれからこれまでの秘密機構を奪いさりはしないであろう（社会民主主義的労働者がこの機構を承認し、確認することはたしかである。このことは、決定や決議が証明しうるよりも百倍も説得的に、生活と革命の進展とによって証明されている）。それは、ただ一つ真に革命的な、また最後まで革命的な階級――それはロシアに自由をなかばたたかいとったが、将来ロシアに完全な自由をたたかいとるであろうし、また自由を通じてロシアを社会主義に導くであろう――の内部そのものからでてくる新しく、若々しい勢力をわれわれにあたえるであろう！

Ⅱ

『ノーヴァヤ・ジーズーニ』第九号に発表された、ロシア社会民主労働党第四回大会招集についてのわが党中央委員会の決定は、党組織内で民主主義的原則を完全に実現するほうにむかって決定的な一歩をふみだしている。大会代議員（彼らは、はじめは評議権をもって出席するが、ついで、疑いもなく、議決権をもつようになる）の選挙は、一ヵ月以内に行わなければならない。したがって、すべての党組織は、候補者の人物の問題や大会の任務の問題の討議にできるだけ早く着手しなければならない。約束した自由をうばい、革命的労働者、とくに彼らの指導者を攻撃しようとする死にかけた専制の新たな試みの可能性を、かならず考慮にいれなければならない。だから、代議員の本名を公表することは（特別なばあいをのぞいては）時宜に適したものであるまい。黒百人組が権力をにぎっているかぎり、政治的奴隷制の時代がわれわれにつかいなれさせた変名をまだすてるべきではない。そして、これまた、これまでのように、「一斉検挙にそなえて」代議員候補を選出するがよかろう。しかし、われわれはこのような秘密活動上の予防策のすべてには立ちいって論じるまい。というのは、地方的活動条件を熟知している同志諸君は、この点でおこりうるいっさいの障害を容易に片づけるであろうからである。専制の諸条件のもとでの革命的活動の経験に富んだ同志諸君は、新しい「自由な」（いまのところまだかっこづきで自由な）条件のもとで社会民主主義的活動を開始するすべての人々に自分の助言をあたえて援助しなければならない。そのさい、わが諸委員会のメンバーには多大の分別ある態度が必要になることは言うまでもない。これまでの形式的な特権はいまや不可避的に意義を失うので、たえず「はじめから」新たに事をはじめねばならず、首尾一貫した社会民主主義的綱領、戦術、組織のきわめて重要なことを、党の新しい同志の広範な層に**証明する**必要

がある。わすれてならないことは、これまでわれわれは、あまりにもしばしば、特定の社会層からぬきんでた革命家だけを相手にしてきたが、いまや、大衆の典型的な代表を相手にしなければならないであろうということである。この変化は、宣伝や煽動のやり方を変えること（いっそう平易にする必要、問題をとりあつかう手腕、社会主義の基本的な真理をもっとも簡単明瞭に、真に説得的な方法で説明する手腕）を要求するだけでなく、組織のやり方をもかえることを要求する。

この小論では、私は組織上の新しい任務の一側面に立ちいってみたい。中央委員会の決定は、**すべての**党組織から代議員を大会に招待しており、**すべての**社会民主主義的労働者に党組織にはいることを呼びかけている。この希望が実際に実現されるためには、労働者を「招待」するだけでは不十分であり、これまでのような型の組織の数をふやすだけでは不十分である。そうだ、このためには、すべての同志諸君がいっしょになって**新しい**組織形態を、自主的・創造的につくりあげることが必要である。ここではあらかじめきめられた規範をけっしてしめしてはならない。というのは、この仕事はすべて新しいものだからである。ここでは、地方の条件の知識と、重要なことは、**全**党員の創意とがもちいられなければならない。労働者党の新しい組織形態、より正しくは、その基本的な組織上の細胞の新しい形態は、旧サークルと比較すれば、絶対にいっそう広範なものでなければならない。さらに、おそらく、新しい細胞はあまり厳重な定形をもたない、いっそう「自由な」、「ルーズな」組織でなければならないであろう。結社の自由が完全にみとめられ、住民の市民的諸権利が完全に保障されているばあいには、われわれは、もちろん、いたるところで社会民主主義的な団体（労働組合だけでなく、政治団体、党に所属する団体）を創立すべきであろう。現在の条件のもとでは、いやしくもわれわれが自由にできるいっさいの方法と手段によってこの目標に近づくように努力しなければならない。すべての党活動家や、社会民主党に共鳴しているすべての労働者の創意を、即刻、目ざめさせる必要かある。いたるところで、報告、座談会、集会、大衆集会を組織して、ロシア社会民主労働党第四回大会のことを知らせ、きわめて平易な理解しやすい形でこの大会の任務な説明し、大会を組織する新しい形態を指示し、すべての社会民主主義者に真にプロレタリア的な社会民民主党を新しい原則にもとづいて創立することに参加するよう呼びかける必要かある。このような活動は、経験にもとづく多くの知識をもたらし、二、三週間のうちに（もし精力的に仕事を遂行するならば）労働者のなかから新しい社会民主主義的勢力を輩出させ、これまでよりはるかに広範な層のなかに、社会民主党にたいする、すなわちいまわれわれがすべての労働者の同志諸君とともに、新しく再建することを決定した社会民主党にたいする関心をよみがえらせるであろう。団体、組織、党グループをつくる問題が、あらゆる集会で即時提起されるであろう。各団体、各組織、各グループは、自分のビューローまたは指導部または管理委員会を、一言で言えば、中央常設機関を、組織の業務をつかさどるために、地方の党機関と連絡するために、党文献をうけとって配布するために、党活動のための納付金をあつめるために、集会や、講演や、報告を開催するために、最後に、党大会の代議員の選挙を準備するために、ただちに選出するであろう。党の諸委員会は、もちろん、このような各組織についての援助について、またロシア社会民主労働党とはなにか、その歴史とその現在の任務はどうか、にかんする知識をあたえるための資料をこの組織に供給することについて配慮するであろう。

さらに、党員が経営する食堂や、喫茶店や、ビヤホールや、図書館や、読書室や、射的場〔**注：参照**〕その他、等々の形で、社会民主主義的労働者組織の地方的な経済上の、言わば、拠点をつくることについても同様に配慮すべき時である。「専制的な」警察のほかに、「専制的な」雇主が、煽動者を解雇して、社会民主主義的労働者を迫害するであろうということをわすれてはならない。だから、工場主の専横からできるだけ独立した基地を建設することは、きわめて重要なことである。

注）射的場（私は適当なロシア語を知らないので、標的にむかって射撃する場所――そこにはあらゆる武器の貯えがあって、希望者はだれでも安い料金をはらってやって来て、ピストルまたは小銃で標的にむかって射撃する――を「射的場」と呼んでおく。ロシアでは集会と結社の自由が宣言されている。市民には射撃をまなぶためにも集合する権利がある。だれにたいしてもこのことが危険なはずはない。ヨーロッパのどの大都会でも諸君は万人に公開された射的場にであうであろう――地下室で、ときには郊外で、等々で。そして労働者が射撃をまなび、武器の取りあつかい方をまなぶことは、けっしてよけいなことではない。もちろん、われわれが本格的に、広範にこのことに着手することができるのは、結社の自由が保障され、こういう施設をあえて閉鎖しようとする警察の悪党を告訴することができるようになったときだけである。）

一般的に言えば、われわれ社会民主主義者は、行動の自由が現在のように拡大したことを、さまざまに利用しなければならない。そして、この自由が保障されたものであればあるほど、われわれは「人民のなかへ！」というスローガンをますます精力的にかかげるであろう。いまや、労働者自身の創意は、われわれ、きのうまでの秘密活動家や「サークル員」が夢想することさえできなかったような規模で、発揮されるであろう。いまや、社会主義の思想は、われわれがしばしば探知することもまったくできないような道をとってプロレタリアートの大衆に影響をおよぼしているし、これからもおよぼすであろう。このような条件に応じて、社会民主主義的インテリゲンツィア〔**注：参照**〕をいっそう正しく配置することに配慮する必要があろう。それは、運動がすでに確固たる地位をしめて、もしこう言ってよければ、自分の力だけでやっていける場所で、インテリゲンツィアがいたずらに押しあいへしあいしないようにするためであり、また、活動がいっそう苦しく、条件がいっそう困難で、経験と知識に富んだ人々の必要がいっそう痛切で、光源が他よりもすくなく、政治的生命が他よりも微弱にしか脈うっていない、「下層階級のなか」に彼らがはいっていくようにするためである。いまやわれわれは、すべての住民――どんなにへんぴな地方の住民さえも――が参加するであろう選挙にそなえても、また、（このほうがもっと重要であるが）公然たる闘争にそなえても、「人民のなかへ」はいっていかなければならない。そしてそれは地方的ヴァンデーの反動性を麻痺させるためであり、大中心地から出てくるであろうスローガンを全国に、プロレタリアートの全大衆のなかに確実にひろめるためである。

注）（第三回党大会で私は、党の諸委員会では、インテリゲンツィア二人にたいして労働者約八人の割合にしたいという希望を述べた〔第八巻、四二ページ〕。この希望はなんと時代おくれになったことだろう。

いまでは、党の新しい組織では社会民主主義的インテリゲンツィア出の党員一人にたいして社会民主主義的労働者数百人の割合にすることを希望しなければならない。

もちろん、行きすぎはすべて有害である。仕事を十分にしっかりと、できるだけ「模範的」に組織するためには、われわれは、しばしば、いまでもまだ、あれこれの重要な中心地にもっともすぐれた兵力を集中しなければならないであろう。経験は、この点でどんな比率をまもるべきであるかをしめしている。現在、われわれの任務は、新しい原則にもとづいた組織のために基準を考えだすことであるというよりむしろ、第四回大会で党の経験からえられた資料を総決算し、定式化するために、もっとも広範で大胆な活動を展開することである。　　注）……は青山が省略

第一〇巻 P13~24 「党の再組織について」

『ノーヴァヤ・ジーヅニ』第九、一三、一四号　１９０５年１１月１０、１５、１６日

署名――エヌ・レーニン

事項訳注

P13　論文『**党の再組織について**』

レーニンがロシアにかえってまもなく書かれた。新聞『ノーヴァヤ・ジーズーニ』にのったレーニンの論文の最初のもの。この論文は、１９０５年１２月のタンメルフォルスの協議会で採択された決議『党の再組織について』の基礎となった。

P13　**独立派**

ズバトフ型のいわゆる「独立社会労働党」のこと。ツァーリ政府の要請により、秘密警察の協力のもとに、１９０５年秋にペテルブルグで創立。労働者を革命闘争からそらせることを目的としていた。１９０８年の初めに消滅した。

P14　**党にたいするアピール**

『全党組織と全社会民主主義的労働者に訴える』というアピールのことで、『ロシア社会民主労働党第四回大会の招集によせて』という表題で、１９０５年１１月１０（２３）日付『ノーヴァヤ・ジーズニ』第９号に発表された。

P14　**「一労働者」の小冊子**

一労働者著『われわれの組織における労働者とインテリゲンツィア』のこと。この小冊子については、第八巻の論文『うぐいすはおしゃべりではやしなえない』を見よ。

P14　『**イスクラ**』(『火花』)

メンシェヴィキの新『イスクラ』のこと。第二回党大会後に、メンシェヴィキばプレハーノフの助力をえて、中央機関紙『イスクラ』を手中におさめた。１９０３年１１月第 52 号から『イスクラ』はメンシェヴィキの機関紙になり、１９０５年１０月まで出ていた。　旧『イスクラ』と新『イスクラ』の関係については、第七巻三ページにたいする事項訳注を見よ。

P14　**ヴァンデー**

フランスの一地方の名。フランス大革命の時代に、この地方には、革命的な国民公会に反対するおくれた反動的な農民の反革命的蜂起がおこった。この蜂起は宗教的スローガンのもとに行われ、反革命的な聖職者や地主によって指導されていた。

ポイント

わが党の活動条件は根本的にかわりつつある。われわれは集会、結社、出版の自由を奪取した。秘密機構とならんで、つぎつぎに新しい、公然・半公然の党組織（と党に同調する組織）をつくることが絶対に必要である。すべての同志諸君がいっしょになって新しい組織形態を、自主的・創造的につくりあげることが必要である。

そのなかで、社会民主主義者でないものが、大量に一挙に党にはいってくる点に、危険な点があると考えることもできよう。そうなれば、党は大衆に解消してしまうであろう。党は階級の自覚した前進部隊ではなくなるであろうし、党は後尾の役割になりさがってしまうであろう。それは無条件に悲しむべき時期となろう。

しかし、われわれはこの危険を誇張する必要はない。社会民主党は名をなし、一傾向を創出し、社会民主主義的労働者のカードルをつくりだした。 あらゆる潑剌とした、発展しつつある党には、つねに不安定と、動揺と、逡巡の要素があるものだということをわすれてはならない。しかし、これらの要素は、社会民主主義者の堅忍不抜な、結束した中核の働きかけに服しているし、将来も服するでだろう。

大胆に前進せよ。新しい武器をとれ。それを新しい人人にわけあたえよ。自分の拠点を拡大せよ。すべての社会民主主義的労働者を呼びよせよ。彼らを、何百人、何千人と、党組織の隊列に加入させよ。党組織の代議員は多くのわが中央機関を活発にするがよい。彼らを通じて若々しい革命ロシアの生新の気を流入させよ。

このような状況の下では、わが諸委員会のメンバーには多大の分別ある態度が必要になる。これまでの形式的な特権はいまや不可避的に意義を失い、たえず「はじめから」新たに事をはじめなければならず、首尾一貫した社会民主主義的綱領、戦術、組織のきわめて重要なことを、党の新しい同志の広範な層に証明する必要がある。この変化は、宣伝や煽動のやり方を変えること（いっそう平易にする必要、問題をとりあつかう手腕、社会主義の基本的な真理をもっとも簡単明瞭に、真に説得的な方法で説明する手腕）を要求するだけでなく、組織のやり方をもかえることを要求する。

党の諸委員会は、もちろん、このような各組織についての援助について、またロシア社会民主労働党とはなにか、その歴史とその現在の任務はどうか、にかんする知識をあたえるための資料をこの組織に供給することについて特に配慮する必要がある。

一般的に言えば、われわれ社会民主主義者は、行動の自由が現在のように拡大したことを、さまざまに利用しなければならない。そして、この自由が保障されたものであればあるほど、われわれは「人民のなかへ！」というスローガンをますます精力的にかかげなければならない。党は、社会民主主義的インテリゲンツィアをいっそう正しく配置することに配慮する必要がある。活動がいっそう苦しく、条件がいっそう困難で、経験と知識に富んだ人々の必要がいっそう痛切で、光源が他よりもすくなく、政治的生命が他よりも微弱にしか脈うっていない、「下層階級のなか」に彼らがはいっていくようにしなければならない。